

国語教育 209

☆ 東京都小学校国語教育研究会・機関誌 2016. 6

未来を拓く国語教育の創造 全国大会に向けて

会長 鶴 巻 景 子

今年度は、十四年ぶりの全国大会を東京で開催する。

科学の進歩と共に、コンピューターやインターネットが身近になり、社会が大きく変化している。子供たちの六十五％は将来、今は存在していない職業に就き、半数近くの仕事が自動化される可能性が高いなどの予測がある。また、二〇四五年には人工知能が人類を越える「シンギュラリティ」に到達するという指摘もある。教育も大きく変化しようとしている。

新教育課程の論議では、(一) 学校教育を通じて育む資質・能力(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力や人間性)と各教科等を学ぶ意義の明確化、(二) 資質・能力を育む教育課程の実現に向けた「カリキュラム・マネジメント」の充実、(三) 資質・能力の育成に向けた「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善等について提言がなされている。特に、アクティブ・ラーニングの視点では、知識が生きて働くものとして習得され、必要能力が身に付くことを目指すものとし、対話的、主体的、深い学びによる学習過程の質的改善が述べられている。

これらの新たな教育の方向性は、これまで本研究会で培ってきた国語単元による学びである。今まさに、昨年度から本研究会が研究主題・副主題として取り組んできた「未来を拓く国語教育の創造 ―思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の充実―」が求められているのである。

こうした中で、昨年度は、新たな研究主題のもと、各部が伝統や文化に立脚し、高い志や意欲をもつ自立した人間として、しっかりと考え表現する力、言葉によるコミュニケーション力、言語により他者と協働しながら主体的に探究していく学びの力を育てる国語単元の開発を精力的に行ってきた。話すこと聞くこと部、書くこと部、読むこと部、言語文化部が開発したどの単元も、子供たちが自ら学ぼうとする探究的な学びの中で、言語による思考力や表現力が育ち、実の場のある学習となっていた。これまで培ってきた研究を大切に、新たな視点を加えて私たちも大きく変化し、この都小国研の学びを次の世代につなげていかなければならない。

全国大会は十月二十七日(木)・二十八日(金)に開催する。私たちは、昨年度の研究をさらに高め、研究に自信をもって、未来を拓く国語単元を全国に広く発信していきたい。そして、これからの時代を生きる子供たちが、言葉がもつ力を信じ、言葉によって困難を克服し、社会や文化を創造していく「ことは・言葉、こころ・心が育つ国語教育」を創り出していきたい。

(杉並区立高井戸小学校)

平成二十七年 度

研究活動報告

事務局長 添野 誠

研究主題

「未来を拓く国語教育の創造」

― 思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の充実 ―

一 研究大会事業

(一) 総会・研究委員総会

五月七日(木)

杉並区立高井戸小学校

・鶴巻景子会長以下新役員承認

・活動計画、研究事業計画

・講演

「未来を拓く国語教育の創造」

文部科学省初等中等教育局

教育課程課教科調査官

水戸部修治先生

(二) 多摩地区大会

六月五日(金)

福生市立福生第五小学校

・悴田康之会長(都小国研副会長

兼務)以下新役員の承認

・活動計画、研究事業計画

・公開授業

・福生市立福生第五小学校三年

・拜原奈穂実主任教諭

・単元名

「教えるよ!楽しいむかしあそび」

(三) まなび塾

七月二十五日(土)

杉並区立杉並第一小学校

十月三十一日(土)

昭島市立中神小学校(多摩地区)

(四) 第二十六回研究大会

二月十九日(金)

杉並区立高井戸小学校

・公開授業 四研究部会

・分科会提案 発表

二 研究調査事業

「話すこと・聞くこと部」

「自己充実を目指し、主体的・協働的に話し合う活動を通して、思考力・表現力及び探究力を育てる」

・公開授業 十月五日(月)

新宿区立富久小学校三年生

・講師 本会参与 河村 静枝先生

・講師 本会参与 丸山 秀光教諭

【書くこと部】

「実の場で活用する、主体的・協働的な書く活動を通して、思考力・表現力及び探究力を育てる」

・公開授業 十一月十六日(月)

台東区立谷中小学校一年生

矢作 朋子主任教諭

・講師 東京学芸大学名誉教授 大熊 徹先生

本会顧問 成家 巨宏先生

【読むこと部】

「実生活に生きる言葉の力を育む読むことの指導を通して、思考力・表現力及び探究力を育てる」

・公開授業 十一月三日(金)

目黒区立八雲小学校六年生

・講師 本会顧問 藤井 治先生

・講師 本会顧問 大久保啓主任教諭

【言語文化部】

「言語文化に親しみ、自ら表現し、学び合う活動を通して、思考力・表現力及び探究力を育てる」

・公開授業 九月二十八日(月)

東京学芸大学附属大泉小学校六年生

・講師 本会顧問 山下 美香教諭

・講師 本会顧問 今村 久二先生

三 研究成果刊行事業

・機関誌「国語教育」発行

第二〇七号・二〇八号

・研究紀要 第三十七号発行

平成二十八 年度

都小国研 事業計画

平成28年度研究主題・副主題

未来を拓く

国語教育の創造

↳ 思考力・表現力及び探究力が育つ

言語活動の充実

副会長 朴木 一史

一 研究主題・副主題

本年度は、中央教育審議会の答申、新学習指導要領の告示が予定されており、新たな教育の内容が具体的に示される。

我が国が、厳しい挑戦の時代を迎えることが予想される中、自ら課題を発見し、その解決に向けて

主体的・協働的に探究し、学びの

成果等を表現し、さらに、他の学

習や生活の中で実践に生かしてい

くことができるようにすることが

重要であり、すべての学習の核と

なる国語教育は極めて重要な役割

を果たすことが求められる。

「未来を拓く」とは、児童が主体

となり、協働的な言語活動を通し

て、確かに言葉の力を身に付け、

身に付けた言葉の力を他教科等の学習や日常生活、さらには未来を豊かに生き抜くために活用していくことである。

そのためには、様々な言語活動を通して、自らの考えを形成し、表現し、協働的な学びを通して、課題を追究・解決していくことが重要となってくる。

このことから、研究主題のもと、昨年度から二年間の副主題を「思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の工夫」とし、研究を推進していく。

二 研究大会事業

(一)総会・講演会・研究委員総会

平成二十八年四月二十五日(月)

杉並区立高井戸小学校

(二)多摩地区総会・研究大会

平成二十八年六月三日(金)

調布市立富士見台小学校

(三)第二十七回研究大会

「第四十六回 全国小学校国語教育研究大会・東京大会」として

平成二十八年十月二十七日(木)

二十八日(金)

杉並公会堂

杉並区立杉並第一小学校

杉並区立高井戸小学校

三 研究調査事業

(一)まなび塾

平成二十八年七月二十三日(土)

港区立高輪台小学校

平成二十八年十一月五日(土)

昭島市立中神小学校(多摩地区)

(二)各支部の定例研究会

各支部を超えて公開する研究授業「小研」を年一回以上実施する。

(三)各支部の研究活動

①研究主題・副主題を踏まえ、

各部の主題を設定し、授業研究を通して研究主題を追究する。

②各支部への研究活動を積極的に支援するための連携を深めていく。

③各研究部会は、大会をはじめ、小研、分科会研究授業、機関紙、研究紀要等に 研究成果を発表する。

(四)各支部の研究活動への協力

研究部会、顧問・参与は、各支部の国語科教育の充実に資する支援を積極的に行う。

四 研究成果報告事業

(一)機関紙「国語教育」

二〇九号、二一〇号の発行

(二)研究紀要 第三十八号の発行

東京大会の概要と 申し込みについて

副会長 神田しげみ

平成二十八年十月二十七日・二十八日、第四十六回全国小学校国語教育研究大会 東京大会、第二十七回東京都小学校国語教育研究大会が開催されます。大会主題「未来を拓く国語教育の創造」―思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の充実―のもと、児童が主体的・協働的な言語活動を通して、豊かな言葉の力を育てる国語科授業を提案いたします。

(第一日)会場・杉並公会堂
開会式後、文部科学省教科調査官水戸部修治先生による基調講演「新たな時代の教育課程と国語教育」が行われます。次に、大蔵流狂言方山本東次郎先生による特別講演と狂言「柿山伏」「附子」の上演です。

(第二日)会場・杉並区立高井戸小学校・杉並第一小学校
午前中は、各会場において「話すこと・聞くこと部」「書くこと部」「読むこと部」「言語文化部」の公開授業・研究協議会が開催されます。研究協議会では協議とともに都小国研顧問・参与等による指導・助言をいただきます。

午後には、会場ごとに五つの分科会で、実践発表を行い、講師による指導・助言をいただきます。

記念講演Ⅰでは「これからの国語教育」の演題で、十文字学園女子大学教授富山哲也先生、文部科学省教科調査官水戸部修治先生の講演会が行なわれます。記念講演Ⅱでは「今、子どもたちに求められる言葉の力」を演題に、元NHKアナウンサー室長山根基世先生、木原秋好先生による講演会が行われます。皆さまの御参加をお待ちしております。

(申し込みについて)

授業等の詳細、お申し込みは「都小国研ホームページ」をご覧ください。ホームページ「全国大会参加申し込みはこちら」にアクセスの上、必要事項を入力して手続きを完了してください。受付窓口の開設期間は七月五日(火)から九月十六日(金)までです。二日目の研究協議会と実践報告会は先着順で決まりますので、早目にお申し込みください。

平成28年度研究の進め方

研究主題

未来を拓く

国語教育の創造

副主題

～思考力・表現力及び探究力が育つ
～言語活動の充実～

副会長 朴木 一史

一 研究主題の設定

本会は、その時代の教育課題に即して研究主題を設定し、先進的な国語教育の研究を行い、国語教育の充実のための使命を果たしてきた。とりわけ、旧学習指導要領が全面实施された翌年の平成十五年度からは、「言葉の学び手が育つ国語教育の充実」を研究主題に据え、一年次に、言語活動を充実させた単元の開発と指導法の工夫、二年次に、児童の興味・関心、課題を生かした学習過程の工夫、三年次に主題的に学ぶ児童を育てる指導と評価の一体化を副主題とし、三年間のサイクルで研究を行い、児童が言葉の学び手として主体性が育つ実績を積み上げてきた。

～昨年度の研究主題・副主題を設定するに当たっては、現代社会における教育課題と新たな教育の方向性を踏まえ、児童が主体性をもって言葉の学習に取り組み、思考力・表現力を発動させて、自らの課題を追究する探究型の単元のもと、言語活動を充実させていくことに主眼を置いた。

～単元開発、学習過程の工夫、評価と指導の一体化は、この研究主題に迫るためには、どれも重要なことととらえ研究の柱に据える。

～研究主題に迫るため身に付けさせたい言葉の力は、次の通りである。

- ① 課題を発見し設定する力
- ② 思考し、表現する力
- ③ 協働的に学ぶ力
- ④ 多面的な視点から解決の方法を判断し、探究する力
- ⑤ 読書の力
- ⑥ 言語文化や国語の特質を感受し、尊重する力
- ⑦ ①～⑥までを生活や他の学習に機能させる力

二 研究主題に迫る観点

～各部会の領域特性に即して、研究推進に当たっては、次の観点を

踏まえて具体的な研究内容を設定する。

(一)研究主題、副主題に即し、育てたい言語能力と目指す児童の姿を明確にする。

(二)児童の興味関心や言語生活を踏まえて、育てたい言語能力を焦点化し、言語活動の工夫が図られる単元を開発する。

(三)主体的・協働的学びを展開し、基礎的・基本的な言語能力が確実に身に付き、活用される学習過程を工夫する。

(四)単元を通して一人一人の児童の言葉の力の育成に資する評価と指導の一体化を工夫する。

三 研究の進め方

～昨年度から、研究組織の名称を「話すこと・聞くこと部会」「書くこと部会」「読むこと部会」「言語文化部会」と改めた。

～各部会は、研究主題を踏まえて、部会毎の研究主題を設定し、部内研、小研の研究授業を通して、研究の成果を平成二十八年十月に実施する研究大会で発表する。

～また、夏季休業中に都内教員を対象とした研修会「まなび塾」において塾の運営や実践発表を行う。

自ら学ぶ力を

つけるために

顧問 神野 雅博

～あるクイズ番組で、国語担当の講師役を務める予備校の先生が、「貧」と「貪」の漢字の違いを説明していた。「貪欲」という熟語を書く問題の解説での説明でこのことであつた。「お金(貝)を分けると『まずしく』なり、ためこみ覆い込み含むために『欲張り』になる」というような説明だつた。

～漢字の学習の折、このような説明をしている授業を見たことがあつたらうか、と思い出してみたがそれほど多くはなかつた。画数・筆順・部首・読みを指導することくらいだつたと思う。熟語を思い出させたり、調べさせたりしていればよい方である。個々の漢字の意味や成り立ちまで扱う時間がなると教員は言うことだらう。

～ところで、「アクティブ・ラーニング」が声高に叫ばれているが、校長の中には「小学校は以前からアクティブ・ラーニングだつた」と平気で囁く方がいる。本当にそ

うだろうか。四十五分間の授業中に教員が何分間個別指導を除いて児童に話をしてのことだろうか。私は、最初と最後の五分間、計十分間だけに限定することで、自らの指導力を向上させることができると言い続けてきた。区市町村教委の初任者研修では、きつと未だ「発問計画」という言葉が横行していることと思う。発問で授業を進行させることを考えている限り「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」や「指導と評価の一体化」は難しい。つまり、個々の児童の学びを保障する授業展開ができていないということである。小学校は以前から今もって「教師主導」の授業しかしていない、と言ってもよいのではないだろうか。児童の実態に応じた指導をしていない証拠が一年の学習内容である「鉛筆の持ち方」を二年生以上の学年で指導しているのを見ないことだ。児童自らを自分の実態に応じて学習の世界に浸らせ、課題をもって解決に向かう学習過程を如何に確立させるか。その簡便な取組を漢字学習でと考える。成り立ちくらい自分で調べさせたい。自己教育力を付けるために。

都小国研で

育てられて

顧問 遠藤 真司

「普通の教師は研究会に出てそれだけで終わってしまう者。賢い教師は研究会で学んだことを、即自らの実践に生かす者」教師になりたての頃、先輩の先生から聞いたこの言葉はずっと私の心に残った。確かにその通りで、学んだことを自分の教室で、自分の指導としてすぐに生かしていけるかどうかで教師の力は計られる。

「聞く話す部」の部長、副会長、会長と、都小国研で責任ある立場で研究と運営に携わってきた。

そこで出会った都小国研の先生たちは授業に対する取り組みが熱心であり、研究に対する思いが深く、さすがに優秀な教師の集まりと感じていた。

そして自分の現役教師時代の研究仲間が、都小国研での運営仲間となり、ともに手を携えて進むことができた。

会長になって全体運営の指揮をとることになった時、この仲間

にどれだけ助けられたことか。決して自分一人で成し遂げることはできなかった。周りで支えてくれる人材に恵まれ、改めて研究を通しての良き人のつながりを実感した。多くの先輩たちからはさまざまなか場でご助言、励ましの言葉を頂き勇気づけられた。研究に取り組む先生たち、会とともに運営してきた仲間、都小国研を愛する諸先輩方など、改めて都小国研で出会った全ての人たちに心から感謝する気持ちでいっぱいである。

退職をして四月から早稲田大学大学院教職研究科で後輩の育成に当たっている。学部を卒業した者現職派遣の者などが同じ場に集って、自分のテーマを決めて、より高度の教育研究に取り組んでいる。この中には私の最後の勤務校であった光が丘夏の雲小で行われた都小国研の研究大会に参加し、その研究に感化された者もいる。

賢く優秀な教師を目指す者たちが、さらに己の高みを目指すために研究に打ち込む姿を見て、自分の経験が少しでも彼らの役に立つことを願っている。都小国研で育てられた者として、より良き国語授業への思いは深い。

出前授業

参与 宮 絢子

小学校教員を目指す学生の指導の最後の年を迎えました。教師として颯爽と巣立つ彼女たちの姿を今年もたくさん見たいと願います。時々、国語や書写の研究授業や書写実技研修の講師として、更に暮れになると児童の書き初め指導者として学校現場にお邪魔しています。先生方の熱心に学ぶ様子や、子どもたちの嬉々とした学びに活力をいただいています。

先日、A小学校から毛筆書写の入門期の指導に呼んでいただきました。校長時代は自校で例年行っていた授業で、担任に「毛筆は面倒」と言わせない工夫を示すチャンス、児童には「毛筆が始まる理由とその意味」を考えさせるチャンス、そして手順と学習意義を児童と教師が共有する場を作っていました。校長職が終わりに近づいた頃の三年生は、私が毛筆書写を指導する理由として「そろそろ、校長先生が教えなくなつたから」

などとまことしやかに答えてくれたことを思い出します。

今回の指導のために行った事前の調査「あなたの字はきれいだと思えますか」の問いに50%（38人中19人）の児童が「思う」と回答しています。高い肯定率に驚きました。また「字をきれいに書きたいですか」には、一人を除き「思う」と回答しています。「思わない」とした児童の理由は、「きれいに書きたいのに書けない」とあきらめにも似た言葉が書かれていました。この児童のためにも工夫ある授業を……と思うことしきりです。更に「三年生から毛筆書写の学習をするのは何のためか」の問いに「毛筆書写がうまくできると、鉛筆でも字がきれいに書けるから」という回答がありました。毛筆書写の目標をしっかりとらえている三年生がいたことに感動です。「皆さんが普段書いている文字を毛筆を使って見直しましょう。そして、その見直しを硬筆で書く時に生かすことです。」などという私のまともは陳腐に響きました。その児童はさらに『日本の伝統が失われないように』と付け足していました。

都小国研の発展を

祈念して

参与 小黒 仁史

私は、都小国研の研究大会で二度授業をさせていただきました。いずれも「書くこと（作文部）」の指導でしたが、私の国語教育の貴重な実践として心に残っています。

研究大会は、自分の担任する学級の授業ではありませんが、会場校の子どもたちがとてもよく頑張ってくれて、自信となりました。

都小国研の研究活動は、国語教育に情熱を注ぐ先生方の創意工夫によって、大きな成果を挙げてきました。都小国研の研究実践が、全国の国語教育を拓いてきたと言っても過言ではないと思います。そして、私もその中で勉強させていただいたことに誇りをもっています。

今、国語教育は、更なる発展と充実が求められています。新たな学習指導要領の改訂に向けて、資質・能力の育成を中核とした教育課程の在り方が議論されています。その中で、言葉の力の育成をね

らいとし、思考力や表現力、感性やコミュニケーションの基盤となる国語力を育成する指導の充実が求められています。

また、学校においては、たくさん若い教員が「国語の授業をどのように進めればよいか。」日々、苦心している実態があります。

都小国研は、このような新たな学力観の形成と、現実的な授業実践の創造を担う国語教育の重要な研究機関です。

本年度の十月には、全国大会が開催され、全国の先生方に都小国研の研究成果を発表する場があります。きっと、研究部員の先生方は、例年にも増して研究活動に熱が入り、指導案の検討や授業づくりに御苦労されていることと思います。

しかし、全国の先生方の実践に役立つ先進的な取組が示されることと大いに期待を寄せています。

かつて、都小国研の先輩が、「国語への愛と、子どもへの愛が、国語教育を拓いていく。」とおっしゃいました。都小国研の先生方の子どもへの愛と国語への愛が結実し、大きな成果が挙げられますことを心から御祈念申し上げます。

編集後記

四月二十五日、杉並区立高井戸小学校にて総会が開催され、平成二十八年東京都小学校国語教育研究会の活動がスタートいたしました。

講演会では、作家の阿刀田高様より「日本語っておもしろい」これからの国語」というテーマでご講演をいただき、改めて日本語のおもしろさについて考える機会となりました。

今年度は、十月に全国小学校国語教育研究大会東京大会が「未来を拓く国語教育の創造―思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の充実―」の研究主題のもと開催されます。

次期学習指導要領の改訂を控え、人工知能が小説を書いたことなどが話題となる時代ですが、児童自身が主体となり、協働的な学びのもと、未来を豊かに生き抜くことができる言葉の力を身に付けられるよう、昨年度より研究を積み重ねています。研究の成果が広がり、生かされ、「未来を拓く」ことにつながっていくことを願っています。

お忙しい中、玉稿をお寄せくださった先生方に心より感謝申し上げます。

昭島市立成隣小学校

加賀田 真理